



名古屋ハリストス正教会

なごや「聖歌」だより12月号2013

伝統って何？

* 正教礼拝の伝統を考える



6. ヘブライの伝統、旧約から新約へ その2 — 新たなるエルサレムよ —

「わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためではなく、完成するためである。(マタイ5:17)

旧約聖書はキリスト教にとっても神の啓示の書物であり続けましたが、キリストの福音の光の中で新しい意味を持つ書物となりました。つまり、ユダヤ教世界ははまだ救世主の到来を待ち続けていましたが、使徒たちは救世主がすでに到来したこと、十字架と復活によって救いのわざを完成したこと、いまでも完成しつつあることをその目で見て知っていました。彼らは旧約聖書をハリストスを縦糸とする一貫した救いの預言として読み解きました。イザヤ書を読むエチオピアの宦官カンダケにその預言の真の意味を説明した使徒フィリップと同じ働きです(使徒言行録8:26-3)。

正教会の聖堂内のイコンやフレスコも使徒たちの解き明かし、教会が伝えてきた「伝統」に従って、キリストによって完成する救いを示すように構成され配置されます。その萌芽はローマのカタコンベの壁画や3世紀のドゥラ・エウロポス遺跡の教会洗礼堂壁画にも見られ、カタコンベの「ヨナが三日目に魚から吐き出される図」では、ハリストスの三日目の復活を表して手を十字架形に広げています。シリアで発見された3世紀の教会堂ドゥラ・エウロポスの洗礼堂では、アダムとエヴァの上に善き羊飼(キリスト)が描かれ、第一のアダムによって死すべきものとなった人間が、最後のアダムすなわちキリストの死と復活によって生きるものとなったことが描かれています(1コリント5:14, 22)。

聖歌においても同様で、預言の歌としての聖詠(詩編)にトロパリ(新約以後の短い歌の総称)を挿入して歌う手法が発達しました。たとえば復活祭のトロパリ「ハリストス死より復活し、死を以て死を滅ぼし、墓にあるものに生命を賜えり」を「神は興

今月の予定

聖歌練習 半田 1月9日(水)12時ごろから

神現祭の練習をします。

名古屋 1月6日と13日代式後。神現祭の練習。

名古屋指揮当番

6日ピーマン松島 20日エレナ広石 27日マリア松島

き、其の仇は散るべし、彼を悪む者は其の顔より逃ぐべし。(神は立ち上がり、敵を散らされる。神を憎む者は御前から逃げ去る。)」で始まる67聖詠(68詩編)の句の間にリフレインとして挿入され、預言が「今かなかった」ことが印象づけられる仕組みになっています。

この考え方は7世紀以降に発展する聖歌形式「カノン」においてさらに発展し、9つの旧約歌頌(カンティクル)の間にトロパリを挿入することで、旧約の預言歌と新約における成就を連結させます。たとえば復活祭の早課カノン第6歌頌はカタコンベの壁画と同じ内容で、「…三日にしてイオナ(ヨナ)が鯨より出しごとく墓より復活せり」、とヨナのできごとと主の三日目の復活が関連づけられて歌われます。同じカノンの第9歌頌では神の母マリアを讃えて、「新たなるエルサレムよ、歌い歌えよ。神の光栄は爾に輝けばなり」と歌い、イザヤ書の預言(60:1)をふまえて、処女マリアが神の子を宿す神殿となり、新たなるエルサレムが始まった、旧約は成就し主の藉身によって新しい約束の時代が始まった、祝えよと高らかに歌われます。

聖書もイコンも聖歌も表現方法は異なりますが、すべての伝統は使徒から伝えられた教会の解釈に従い協調して福音宣教を行うもので、個人的な解釈の表現手段ではありえません。



ヨナが大魚から吐き出される(聖マルチェリウスと聖ペトロのカタコンベ)



善き羊飼いとアダムとエヴァ(ドゥラ・エウロポス遺跡の洗礼堂) エール大学

教会では「音楽」も「ことば」もそれ自体では自己完結しません。音楽と言語は「奉神礼」としてともに働くものです。礼拝の規則は神学的な原則です。音楽と言語によって神学が表されます。ですから神学の意味を音楽とことばを用いて正しく祈る総合的な技術が聖歌者には求められます。また奉事の秩序は、何が、いつ歌われるかによって形づくられます。礼拝の細かな動きまで理解し、そこに含まれる神学に従って聖歌を構成する礼拝感覚が大切です。ともすれば「音楽」や「ことば」は芸術作品と受け取られ、参拝者を偶像崇拜の迷いの道に導く危険もあります。

「奉神礼音楽」として翻訳（解釈し演奏）する技術とは、音楽、言語、奉神礼という三つの「わざ」を総合的にブレンドする技術です。ブレンドにはバランスとプロポーションが大切です、それを得るためにはよいセンスを磨くことです。その「わざ」とは、いわば水をワインに変えることです。残念ながら、ワインが酢やジュースになったり、水になっている場合もあります。

その1.

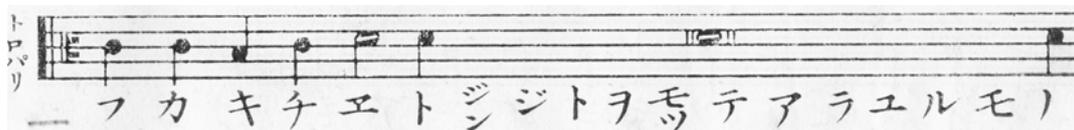
「聖歌に翻訳する」のための基本原則12箇条を手短にお話します。この基本原則は、**教会音楽とは「祈り」である**ことが前提になっています。個々の原則について詳しいことは、次章「聖なる音楽のひびき」で詳しく述べます。

教会では、音楽は礼拝です。音楽は祈りで、祈りは歌です。「凱旋の歌を歌うこと」、「高らかに歌うこと」、「宣言すること」、「語ること」はすべて、聖なる歌として表現されます。どれをとっても、ただ単に話されるものではありません。「歌うこと」によって教会が自分を表現します。新約も旧約も聖書は教会を、ハリストスの体、あがなわれた神の民を、「天においても地においても、**一緒に歌うあつまり**」として表します。

音楽は礼拝のオマケではありません。歌は教会が祈る手段です。音楽は礼拝を補足するのでもなければ、飾りでもなく、伴奏でも、BGMでも、準備でも、ムードづくりでも、穴埋めでもありません。音楽は奉神礼上の働きに従って、奉神礼音楽に翻訳されます。

参考資料 聖歌の工夫、読みやすい楽譜 例「深き智慧と…」 ♪色々工夫できます

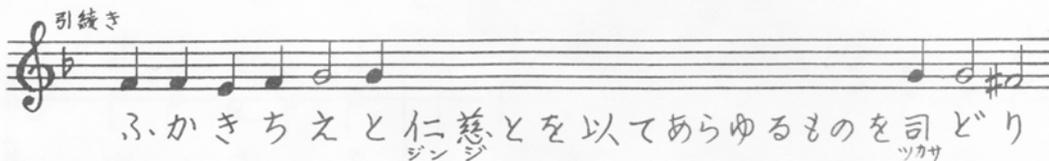
1 明治時代の石版刷り



2 単音聖歌譜(1979)



3 豊橋の手書き譜(1983)



4 コンピューターの楽譜ソフト



読みやすい楽譜にするためにどんな工夫があるでしょうか。最近ではコンピューターの楽譜ソフトを使って書くことが多いのですが、ちょっとした工夫で読みやすくできます。

歌詞のことばは大きめに

私自身も含めて老眼の人が多いため、文字はできるだけ大きい方が助かります。

漢字かな交じりで書く

日本語はカナだけだと読みにくく、意味を取り違えることもあるので、できる限り漢字かな交じりで書いています。ひらがなが続く場合は分かち書きにすると分かりやすいようです。コンピューターソフトの多くは自動的に二分音符の後のスペースは四分音符の場合の1.5倍にように設定されていますが、それではことばが切れてわかりにくいので、手動で配置し直します。

ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgia> 奉神礼や聖歌の実践資料